

令和7年8月28日(木)



1年生の国語の授業は、物語の読解でした。教材は、「大人になれなかった弟たちへ…」です。俳優・米倉 斉加年（よねくら まさかね）さんの絵本が原典です。国語の教科書には、いわゆる戦争教材というものが掲載されています。小学校では、「ちいちゃんのかげおくり」、「ガラスのうさぎ」、「一つの花」などが有名です。いずれも、戦争の悲惨さや愚かさ、平和への希求がテーマとなっています。

「大人になれなかった弟たちへ…」は、米倉さんの実体験が綴られています。戦時の食糧難によるひもじさから、米倉さんは、悪いこととわかっていながら、生まれたばかりの弟のミルクを盗み飲みしてしまうエピソードには、胸がつまされます。母親も、米倉さんを叱ることができません。結局、弟は餓死してしまいます。米倉さんの戦争体験は、ひもじさと弟の死に集約されるのです。



今年で戦後80年となりました。戦争体験を語り継ぐ人々も少なくなっています。私が子供のころは、上野公園で傷痍軍人がハーモニカを吹いていたりと、隣に住んでいたおじさんの腕が戦傷のため無かったりして、少なからず戦争の惨禍に触れる経験がありました。今の子供たちは、我が国の戦争を実感する機会も減り、歴史の1ページとしての認識にとどまっているかもしれません。平和であることの有難さや喜びは、先人たちの苦難と復興への努力の上に成り立っていることを学ぶためにも、国語で戦争教材を扱う意味は大きいと考えます。

2年生の理科は、生物の細胞のつくりとはたらきの授業でした。本時は、生物の体が細胞からできていること及び植物と動物の細胞のつくりの特徴を見出し、細胞のはたらきを理解することがねらいです。授業のなかでも取り上げていましたが、私たち人間も細胞が集まってできており、その数はおよそ37兆個といわれています。なかなかイメージできるものではありませんね。



手塚治虫の「火の鳥」のテーマは命です。作品の中では、命がミクロの視点でもマクロの視点でも描かれています。うろ覚えですが、こんなエピソードがありました。「もし、細胞に意思があったとしても、細胞自体は人間を構成している1つであると自覚することは無いだろう。また、もし私たち人間が、宇宙またはそれよりもっと大きな生命体を維持するための1つの細胞だとしたら…？」もちろん、そんな意識もなく私たちは日々生活しています。ミクロの世界から一気にマクロの世界へと導く手塚治虫さんの発想力には、さすがという他はありませんが、こちらのイメージが追い付かず少々混乱してしまいます。

最近のニュースで、自動車1台の自動運転でAIが一日に処理するデータ量は、767TB（テラバイト）だということを知りました。テラとは 10^{12} （＝1兆）です。つまり、767TBは、7670000000000000バイトというわけです。人間を構成する37兆個の細胞のうち、どれだけが脳細胞を構成しているかわかりませんが、自動車を運転するということは、脳がどれだけ高度な情報処理をしているか驚くばかりです。

明日、8月29日は、出張により校長不在のため、「WEST LIFE 校長の目」は、お休みします。